

阿南市、室戸市、伊予市研修報告書

今井勝巳

実施日 平成30年10月22日～24日 (二泊三日)

参加者 今井勝巳 大島文男 大貫雄二

10月22日 阿南市

面会者 議長 住友進一 産業部商工観光労政課 課長 中川恭一 主幹 市瀬幸

阿南市サテライトオフィス&テレワーク推進事業は平成28年就業機会の創出と女性活躍推進を目的にスタートした事業である。働きたくても育児や家庭の事情、健康状態など様々な理由で就業出来ない人がいることも事実である。もし、時間や場所にとらわれず仕事が出来るとしたら素晴らしいことである。この様な場所づくりがこのプロジェクトである。その初めとして、阿南市では「プロライターの育成事業」を定期的実施してきている。これらの資格を得ることにより自宅に居ながら好きな時間に仕事ができる訳である。この事業では、主婦の応募が多かったとの事である。新たな雇用と働き場所を創出するこの試みは先進的と感心した。矢板市の場合、格段に交通アクセスに恵まれているわけであるから東京からのバックアップオフィス提案など地域戦略として活用するのも一案かもしれない。東日本大震災以降、危機管理に関してはいかなる企業であっても喫緊の課題として取り組まなければならない状況にある。単に人口増加策を模索するだけでなく企業のバックアップ候補地として矢板市を活用すべきではないだろうか。

現地見学 あなんスマート・ワーク創造拠点施設（平成28年度地方創生拠点整備交付事業）平屋建床面積103.63㎡ 平成30年3月30日完成 総事業費45000千円内200万円が交付金である。現在2社が入居して使用している。

10月23日 むろと廃校水族館

館長 若月 元樹

驚きの現場での研修であった。得てして廃校利用の現状は多少の違いがあるにしても想像の範囲である。雨天もあって交通量もまばらであり通過する街並みもこれといった特徴もない。ありふれた海沿いの集落の風景が続いており、背後には急斜面の山が迫っている。国道を走ること暫くして廃校水族館の看板があった。路地に入ると間もなく学校の校庭に入ったが看板以外全くと言って学校そのものの佇まいであった。昇降口と思える場所に受付があり何処が水族館なのかと不思議に感じた。館長に粗々の説明を受けている間に入館者があとから後からとやって来る。こんな悪天候に関わらず特別な日なのかと尋ねてみたが、館長は特段何もないと云う。階段を上り二階の会議室に案内される。途中の踊り場や廊下には室戸の自然の案内や昔懐かしのオルガンや教材が展示してあった。又、廊下側からプールが見下ろされ、多くのチョウザメが確認できた。非常階段からプールサイドに下りることが出来、間近にサメの生態を観察できるようになっている。

当廃校利用は平成 18 年 3 月 31 日旧椎名小学校を改修して水族館として再利用したのである。平成 26 年 8 月、日本ウミガメ協議会から博物館として廃校の再利用の提案があり、また地域からは集会所や避難所、高齢者の活動の場としての再利用などの要望もあった。これらの経過を踏まえて、平成 27 年 6 月「旧椎名小学校活用検討委員会」を立ち上げ「室戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略」及び「高知県産業振興計画地域アクションプラン」において地域振興政策として取り組んできたそうである。現在、職員は 4 名であり当初の入館者は 4 万人であったが現在は約 10 万人とのことである。平均的にお年寄りが多く、バリアフリー化が弱いことが欠点といえる。設置目的は地域資源である海洋生物の飼育や漁業関連資料等を中心とした展示・調査研究及び体験学習を通して、自然環境への意識高揚を図ると共に、観光客等の誘致及び交流人口の拡大を促進することによる、地域活性化にある。施設の概要は、室戸海域で生息し獲れる海洋生物の飼育・展示・研究であり約 50 種類 1000 匹以上が展示してある。又、希少海洋生物の飼育展示ができていた。総事業費は約 5 億 5 千万円であり NPO 法人日本ウミガメ協会による指定管理運営が行われていた。

10月24日 伊予市

副議長 北橋豊作 都市住宅課長 三谷陽紀 課長補佐 久保貴比古

技術監理監 隅田英久 庁舎建設室主任 横山元 事務局長 米湊誠二

新庁舎建設の取り組みについて、市民合意プロセス・入札方式・予算・建設面積の考え方、意見公募の内容など現場において研修を行った。新庁舎建設は合併特例債を活用している。庁舎建設計画でスタート時点で苦慮しているのが建設場所の選定、さらに建設費用である。現時点までいくつかの新庁舎の現場視察を行ってきたが大半がこの問題を解決することに多くの時間を費やしている。そして、理解を得るために多くの意見を取り入れるがために何か無駄な空間やスペースを見かけることがある。あまりにも理想を求めたが故、機能性を失い、空調関係のロスを生み出しているなど疑問を感じたこともある。伊予市新庁舎は意外とコンパクトに仕上がっており、全面に広がる瀬戸内海を意識し、電算設備などは浸水などを想定し上の階に集約されていた。又会議室や面談室などの空調設備にも工夫が施されていた。矢板市としても老朽化した庁舎対策は一刻も早く解決しなければならない大きな課題である。今後の参考になればと考え先進地事例詳細資料を添付する。